■特集■

小田深山 MTB フェスティバル 2026



マウンテンバイク（ＭＴＢ）の競技大会「小田深山ＭＴＢフェスティバル２０２６」（以下「フェス」）が９月19日、ソルファオダスキーゲレンデで開かれました。緩やかな斜面を利用した特設コースを駆け抜け、タイムの速さや安定性を競います。子どもから大人まで笑い合い、声援を送り合う声が、夏のゲレンデに響きました。

ここ小田深山ではかつて全国規模のＭＴＢ大会「リッジランナーカップin小田」（以下「ＲＲＣ」）が開かれ、多くのライダーがこの地から育っていったといわれています。ＭＴＢの「聖地」で復活したイベントの様子と、自転車を愛する皆さんの思いを紹介します。













小田深山に戻ってきた

熱いレース、再び



フェスには県内外から90人以上が参加しました。夏のゲレンデに登場したコースを駆け抜ける選手たち。応援のカウベルを鳴らす音が、会場に響き渡ります。

フェスの開催は昨年に続く2回目。かつて多くのライダーが熱狂したRRCを知る有志が集まり、「小田深山にもう一度あの感動を」と、新しいMTBイベントとして復活させました。競技種目は、下りの2コースを同時に並走する「デュアルスラローム」で、挑戦は一人3回。速さの他、3本のタイム差の少なさでも順位を競います。選手は来場者からの温かい声援を受けて、思い思いにレースを楽しんでいました。

実行委員長の井上修(おさむ)さんは「小田深山に新しいにぎわいが生まれてうれしい。豊かな自然の魅力を知ってもらうきっかけにもなれば」と、大会の盛況を喜びました。















小林 瑞季(みずき)さん

小林 雅章(まさあき)さん

瑞季さん　下りは滑りやすくてちょっと難しかったけれど、応援がたくさん聞こえて頑張れました。意外と怖くなくて、友達と一緒にできるのも楽しい！　来年は1位を狙います。

雅章さん　MTBは続けるとどんどん上達して楽しくなります。まずはレンタルバイクで試してみるのがおすすめです。親子で楽しめるフェスに、ぜひ一度来てみてください。

真弦さん　誕生日にじいちゃんがMTBをプレゼントしてくれました。一緒に乗りたかったから本当にうれしかったです。チェーンが外れても3秒くらいで直すじいちゃん、格好いい！

真吉さん　父の影響でいろいろな遊びを経験してきました。親として子どもと一緒に遊び、楽しさを知ってもらうのは大事なこと。3世代で集まる場をくれた内子町に感謝です。



岡田 真弦(しんげん)さん

岡田 真吉(しんきち)さん

原点にして最高峰

「リッジランナーカップin小田」

フェス復活のきっかけとなったＲＲＣ。その熱狂は多くの人の心に残り、小田深山に再び、自転車仲間たちを呼び戻しました。過去を知る２人のライダーに、当時の思い出を振り返ってもらいます。









小田深山で熱狂、西日本最大級の祭典

ＲＲＣは旧小田町・小田町観光協会主催のＭＴＢイベントとして、平成2年に第1回大会が開かれました。翌年には日本マウンテンバイク協会の公認を受け、西日本最大級の大会となります。種目はクロスカントリーやデュアルスラローム、ダウンヒルなどで、広大なゲレンデや千年の森を活用した多様なコースを用意。チャンピオンクラスは全国大会の予選も兼ねており、全国各地から実力者が集まっていました。当時を知る人は「とにかく盛り上がりがすごかった」と口をそろえます。

同大会は平成14年からは実行委員会主催となり、ＭＴＢブームの陰りも受けて、翌15年で中止となりました。それでもＭＴＢの魅力に触れ、出場者同士で語り合った経験は、今も忘れられない熱い記憶として、多くの人の心に刻まれているようです。



（写真提供）山口広隆さん、武田美夕紀さん

Interview

仲間との思い出も小田深山には詰まっている



武田美夕紀（みゆき）さん＝東温市＝

ＭＴＢを始めたのは20歳くらいの頃。仲間に誘われた勢いで参加したＲＲＣは、千年の森を走るハードなコースにジャンプ台と、他にないものがいっぱい。全国に友人もでき、かけがえのない経験になりました。その後、他の全国規模の大会出場に向けて、自転車が嫌になるほど練習しました。それからしばらく競技から離れていましたが、夫に誘われてある試乗会に行ったときに運命の出会いが――。バイクを漕いだ瞬間に楽しさが一気によみがえり、第二の自転車人生が始まってしまいました。フェスの復活を知って「また走れるんだ」と、とてもうれしい気持ちです。仲間との思い出が詰まったこの場が、今後も続いていってほしいです。

小さな頃のワクワクがふるさとを振り返る種に



上野　亮（りょう）さん＝松山市＝

幼い頃からＲＲＣでＭＴＢのワクワクを味わってきました。年齢関係なく同じ空間で笑い、泥んこになった記憶が、今も鮮明に焼き付いています。県外から帰って自転車屋を開いた頃には、昔のように子どもが自転車を楽しむ場は少なくなっていました。自分が経験した感動を次世代に伝えたい――その思いで、さまざまな大会運営に関わっています。小田深山のフェスでは、子どもも楽しめるコース作りをしました。キッズカテゴリーは子どもが主役。大人は全力で応援です。皆さんの心に残ってくれたらうれしいですね。思い出はいつまでも心に輝き、大人になってもふるさとを思い返すきっかけになると信じています。

自転車がつないだ“縁”

フェス復活の裏には、自転車を通じてまちを盛り上げようと奔走し、大会を陰で支えた皆さんの活躍がありました。そしてその出会いもまた、自転車がつないでくれた「縁」でした――

人とのつながりで、内子はまた輝く



合同会社We Ride Japan代表
大川　民恵（たみえ）さん

内子町の地域おこし協力隊として「自転車での観光振興」をミッションに活動してきました。現在は夫と立ち上げた会社で、訪日外国人向けのサイクリングツアーを企画・運営しています。

隊員時代から、グループで自転車に乗って町内を巡る体験イベント「コミュニティライド」を続けてきました。そこに参加してくれた山口広隆さんと、小田深山担当の隊員、役場職員らがつながって意気投合。今回の「小田深山×自転車」のフェスが実現しました。私も大好きなフィールドの一つなので、形になったことがうれしかったです。内子町のすばらしい資源が、人とつながることでさらに輝く――それを実感しています。

体を動かすアクティビティは心身ともに心地よく、気持ちも前向きになれます。特に自転車は、自分の行動範囲をより広げてくれるもの。行く先々で新しい出会いや発見があるのも魅力の一つです。イベントをきっかけにたくさんの人が内子町を訪れ、まちの魅力を知ってもらえたらうれしいです。

「大人だって楽しい」が、きっと次の原動力に



MTBインストラクター／フェス審査委員長
山口　広隆（ひろたか）さん

私がMTBを始めたのは社会人になった頃。立ち寄った自転車屋のメンバーと仲良くなり、大会に出たのがきっかけでした。みんな自転車を心から楽しんでいて、「この人たちと一緒だと楽しいだろうな」と思ったものです。大会でもたくさん友人ができました。実力に関係なくみんなが仲良くなれるのは、MTBの大きな魅力です。フェスを復活できたのも、自転車が偶然つないでくれた人の「縁」のおかげ。昔、大会で競い合った仲間も手伝ってくれました。今年は「愛媛サイクリングの日」イベントとして、多くのスタッフに協力いただけたのも大きかったです。一緒に汗をかいてくれた皆さんに、感謝しかありません。

大会で大事にしたのは、みんなが楽しめること。皆さんに自転車を笑顔で楽しく続けてほしいと常々思っています。大人が一生懸命笑い、楽しむ姿――その情熱は次の若い世代の子たちにも伝わっていくと思います。好きなことを、肩肘張らずに続けましょう。私が昔、生き生きした先輩の姿に憧れたように、私自身が楽しむことの「生涯現役」でいたいと思います。





世代を超えてつながれるMTBの魅力

MTBの魅力は、誰もが同じフィールドで楽しめることです。フェスではMTB初体験の子どもも、ベテラン選手も、同じようにレースを走ります。会場から届く温かい声援と一体感に、まるで小田深山に「帰ってきた」ように感じたかもしれません。世代を超えて人々をつないでくれる力が、MTBにはあります。

楽しかった思い出と情熱は連鎖する

山口さんは「自由に気兼ねなく走り回れる環境は貴重。小田深山にはいろいろな遊びの可能性がある。続けて来てもらえるよう工夫していきたい」と話します。数十年前の楽しかった思い出は消えることなく、この小田深山に帰ってきました。そして泥だらけになって本気で楽しむ人々の姿がまた、見る人の心を動かしています。情熱は連鎖するように、確かに広がっています。